

# 老人の眼に映った政局

荒 又 重 雄

## 扇面の翁と媼

わたくしが幼かった頃には、扇面の中央に寿の字が入り、両脇に幸せそうな白髪の老人夫婦のお面が配された額が、座敷の鴨居から吊り下げられて、壁に架っていました。長い顎鬚の老人と寄り添う老婆の顔など、近ごろは土産品にも見ることがなくなりました。先年の韓国では壁掛けやループタイで見かけましたが、今はどうでしょうか。

「老老介護」の様子などが近年時折問題視され、テレビに放映されたりしています。もちろん適切な援護が家族親族や地域から得られることは重要です。しかし、ある範囲までは、老人が互いに助け合う姿は、幸せな社会の証拠でもあります。

長生きして「幸せ」な老人の眼から見ると、「道徳教育」を推進して「親に感謝」をなどと「強制する」日本の政治的トップが道徳的ではありません。「論言汗の如し」とか「李下に冠を正さず」とかの徳目を自分に課して守ろうとしているように見えません。明治の「教育勅語」で、民は「国憲に遵」へと諭

され、戦後には女性も初めて参政権を得た自由な普通選挙による衆議院で審議して決定し、天皇が公布した憲法に、現政権は抗つていません。

## 消費者の先に生産者として

社会保障制度の複雑な制度が問題になる時、家計の立場からこれを論ずる役割をふられた人が、「これだけ払うとこれだけいただきます」、「このようにするとこのようにお得です」と解説されるのに、とても違和感があります。そもそも社会保障の根幹は社会保険であって、これは営利事業としての保険とは違って、被保険者である勤労者が保険者としても経営参加しているものだったのに、その感覚が消えているのです。

単純明快な労働基準が規制緩和の名の下に曖昧になり、ワーク・ライフ・バランスなどと言い換えても「カローシ」や労働苦からの自殺が頻繁です。ここでは、提供するワークの中味に対する労働者たちの誇りや自覚が、ひどく薄れているように思えるのです。提供される製品やサービスの質に対する労働者た

ちの連帯した誇りが薄れ、モンスター・コンシューマー同士の要求がましい傷付け合いだけが目立っているように思えるのです。これはいけない。さらに言えば、老人の家事にも余暇にも「生産」の側面があるのです。

## 人々の協力こそ大切です

わたくしは若い頃に古書店で英蘭小辞典を買い、自宅の書棚に置いていました。一回だけこれが役に立ったことがありました。人に相談されて、榎本武揚がラテン文字筆記体で書いた軸の文を解読したのです。「大事なものは会社だ」と読めました。坂本竜馬の「海援隊」も会社でした。これが当時の人々の「あたらしい協力」の仕方だったのです。これからの日本でも、あたらしい時代のあたらしい「協力」が必要になるのに、「共謀罪」の適用がその「協力」の妨げになっては困ります。

「岩盤にドリルで穴を開ける規制緩和」など言っている足下で、あたらしい「協力」が必要となっています。旅館業の規制を緩和して、観光客相手に広く民間の私宅やマンションの一角を貸し出そうとする中央政府の政策は、足下の千代田区で、近隣の住民の福利を侵害しないように区としての規制標準をつくろうとする動きを起しています。

▲あらまた しげお・北海道大学名誉教授▽